# 銘心小稿

木島櫻谷

藝術にあれ學術にあれ、世上百般の事物は皆時代の推移と共に、幾多の消長を見、變遷を經、その間、一脈の連鎖があつて、外部的又内部的に、既往の消長と今日の盛衰とに動かしがたき因果關係から、全然離れることの出來ないものがある。それ故今日の因由をなし來つた、過去幾十年の昔に遡つて、その經路をふり回つて見ることは、之によつて更に將來の進展を促すべき暗示を得、ある教訓を受けることも多大なものがあるから、只なつかしい過去に對しての回顧的情緒に浸るだけのものでは決してなからう。

今夏東朝社がその新築記念の事業として明治大正名作展を開催したことは、前述の意味から考へて藝苑に貢獻せしこと蓋し多大なものがあつたであらう。

幾多の先覺が時代の風潮に逆ひ生活苦と戰ひつゝ一意專心藝術の精進に努力した涙ぐましい跡も歴々と窺はれるのみならず、今日の作家の心づかぬことを、幾十年以前に既に先驅をつけて居ることもあり、今日の作家に缺如して居る藝術としての或重要なものを却て既往の作家に見出すこともある。從て藝術の時代に於ける盛衰と其作品の眞價値とが反比例をなすことなどあつて太平の夢になれた盛世には偉材がなく、亂世には却て困憊の中から英雄が出現するやうなものかとも思はれる、私は陳列品を通じて無言の教訓を聞き少からず激發されるのであつた。只時日にあまり餘裕がなかつた爲か、その作品の蒐集範圍と採擇の方法に於て、私としては、未だ十分と思はれない點もあつたが、之はあまり隙を得て筆を望む



ものに、ひとしからう。

場中に最も目だつて且つ私の年少時代を思ひ出して最もなつかしいものは雅邦翁の龍虎の屏風である。これは曾て本誌上に少し書いたこともあつたが、富豪岩崎氏が第四回勸業博開催（明治二十八年の春）を機とし東西兩京の大家五六名宛に六曲屏風一双の揮毫を依囑した、して之を全部美術館に陳列して斯界の進展を促す一機會を與へたのである、富豪の計畫としては最意義あるもので從つて依囑されたる畫家も單に自己の出品と云ふよりも一種の競技展覽會であるから各作家の長技をふるひ異常の緊張と努力になつたことゝ想像される、恰も東西兩京に於ける畫壇の大相撲で當時藝苑の一大偉觀であつた。

記憶によつて筆者と畫題をあげて見ると、

東京　龍虎圖　橋本雅邦
松林遊鹿圖　瀧和亭
菊花鶏圖　野口幽谷
司馬温公獨樂圖　川端玉章
蓬古嬰來圖　松本楓湖
青綾山水圖　野口小蘋

京都　耶馬溪圖　今尾景年
群仙圖　鈴木松年
蒼鷹圖　望月玉泉
江の島圖　森川曾文

雅邦翁は此龍虎屏風の外に今一點十六羅漢圖を出品された、さうして此十双の屏風揮毫者は鑑、審査員に任命されて審査總長は九鬼隆一男であつた、審査の結果、屏風の畫は全部妙技二等賞を受けたが、獨り龍虎屏風だけは賞に入らずして却て十六羅漢圖に妙技一等賞と云ふ繪畫部唯一の賞がついた、當時畫家と評家の意見も此龍虎圖が從來多く見慣れて居つた圖の傳統的な構想や手法とは著しい相違があつたから、期せずして皆驚異の眼をはり奇怪な感をして之を褒めるものは極めて少く殆んど凡てが口を極めて非難したことを覺へて居る、夫故龍虎屏風が無賞で羅漢圖が優賞になつたことには一般異議かないやうであつた、かゝる時に靠靡一壁、天外に大獅子吼を聞いたのは大朝の論文であつた、それは當時大朝の顧問格であつた故高橋建三氏の意見であつたと聞いたが別に署名はなかつたから果して同氏の意見かどうかは知ら

ないが、――審査員が最高賞を龍虎の屏風に擬せずして[illegible]平凡作と見るべき瀟湘圖に與へた愚を笑ひ――龍虎圖が落第したのでなく審査員が龍虎圖に落第したのである、龍虎圖の價値は岩崎氏の擁する富よりも大なり――とまで激賞したのである、洵に雅邦翁の唯一の知己とも云ふべく老畫伯の努力に多大の理解と同情をもつたものであつた、まだ年少の私は非難の世評が當つて居るか高橋氏の意見が正當であるか適當な判斷は出來なかつたがそれにしても此屏風の前に立つた時は何だかわからぬながらに或異常な力に引つけられるやうな思がして世評があまりに錐者の努力を認めずに徒に古畫の龍虎より得た傳統的な概念に囚はれて不眞面目な惡罵をするのには少からず反感を持つやうになつたことを覺へて居る。

由來此畫題は和漢の古名匠が遺した傑作が隨分多くある、牧溪の龍虎、陳所翁の龍、雪舟、雪村、元信永徳より探幽守景にいたるまでの傑作は固より東山時代の諸家及狩野の一派など好んで之を畫き近代では應擧や岸駒なども隨分大作を遺して居るから畫題としては、決して新しいものでもなければ珍しいものでもないが、古人の此畫題を扱ふて居るものは大抵水墨畫であつて着色のものは極めて少い、近代の應擧や岸駒などには往々着色のものもない事はないが何だか卑近で矢張古作家のものとは比較できないものである、元來かゝる主觀的な神秘的な表現には着色よりも水墨の濃淡によつて其漂渺たる韻致を深からしめる方が表現の靈化をよほど助けることが出來ると思はれる。

龍に對する虎は實在のものであるが、龍は云ふまでもたく非實在で此世界に見ることの出來ない麒麟や鳳凰と同じく空想の所産である、近代になつて前世界の遺物として龍に似た骨格の一部や足跡の印されたものが各地に發見せられるが、古來の畫龍はかゝる動物の一種で地上を徘徊して食餌をあさる樣なものではない、宇宙間に於ける極めて神秘的な靈力の體現であつて、之に對する偉大な力の象徴として地上實在の虎を假りて配したのである。天上に於ける絶大なる靈力と地上に於ける絶大なる靈力との葛藤、驚天動地の宇宙間に於けるあらゆる力の一大葛藤、一大壯美を象徴たるものであるまいか、洵に雄偉壯絶そのものゝ樣な畫題であるから、虎も地上に彷



徨して餌をあさる現實の虎では固よりない、只虎の形狀を假りた一種特異の靈物でなければならぬ、かるが故に近代の應擧、呉春など寫實味の畫家が遺した此の畫題の作品に傑作として見るものは殆んどないと云つてよからう、此點になると矢張支那の古名家や東山時代より德川初期の巨匠には傑作が隨分多いが、唯此畫題として最困難な濃彩で而も極めて謹嚴な描寫でかゝる一大作を試みたのは古來たゞ雅邦翁一人と云つても過言ではあるまい、流石に翁は古人の轍を踏襲せず、此畫題の表現に比較的都合のよい水墨を以てせずして、古人の未だ試みざる極彩色と一點一劃苟もせざる筆致でこの難問題を解決したところに翁の面目が躍如として居る。私は不幸にして雅邦翁の生前に一度も其清容に接したこともないが、寫眞で見ると極めて溫和な親しみ深い老翁のやうに見受ける。恰も蛟龍が池中に潛んで居るやうに絶大な威力をその溫容の中に包藏して居られたのであらう、それが一たび此畫題を假りて六曲一双の大畫面に張りきるやうな力で表現されたのであるまいか、內在して居つた翁の氣魄の寫眞と云つてもよからう、之を古名匠の作に比して毫も遜色なきのみならず、優に別個の地歩を占めて堂々と對抗し却て古人をして瞠目せしめるものがある。

かゝる非現實の畫題はそれが自然現象に拘束せらるゝ點がないだけ、これを容易に傍觀すると或點に於ては却て自由で容易なるが如く考へらるゝが深く此畫題の眞意義に立つて一大作を完成するには非常な詩的空想と豐富な創造性の經緯にまたなければ、只筆先の器用な技巧位では到底かくの如き立派な結果を見ることは出來ないであらう。況んやこれが老齢六十餘歲で普通人生から見れば老頽に屬する時代の努力とは實に驚くの外ないのである。

彼の巖角に渦まいて天に冲する狂浪怒濤を見よ、古來有名な馬興祖や馬麟の波濤圖より更に幾層の怪奇奔逸を極めて居るではないか、怪物の如き黑雲の中より一攫猛虎を捕がんとする龍の巨腕を見よ、更に其眼精の鋭さを見よ、陳所翁や牧溪などの畫龍とは全然異つた雅邦翁獨自の創造性を認めずや、怪風猛雨に搖れて弓のやうに曲れる幾竿の竹、腰を地につけて踏張れる双の前趾に測るべからざる虎の力を見よ、宇宙間に比較する事の出來な

い絶對無限の力の葛藤である、龍虎の形を假りて象徴されたる絶大な力が翁の豊富なる創造性に醞醸せられ靈化せられた一大詩篇にあらずして何であらう、その筆致の謹嚴なるは眞に是――森々として武庫の矛戟に似たり――とも云ふべく全畫面は緊張して一分のゆるみもなく見るものゝ呼吸が迫つて來る程人を壓する氣魄の大さがある、凡て謹嚴な描寫は動もすると筆路が凝滯し易く固定し易いが、此作品にはさる憾みは少しもないのみならず怪雲猛雨と云ひ狂浪怒濤と云ひ躍る龍、踞る虎、折れんかと亂れ戰く竹の姿と云ひ描かれたる凡てのものが悉く動的であるにかゝはらず、動く物象の凡てが巧妙に綜合せられて此大畫面の統一を少しも拗して居ない、特に龍の巨腕にまとへる青白い焔は翁の創意であらうが胡粉の上に淡く群青の隈どりを用ひたのみで、此驚心瞠目の畫面に更に一段の凄氣を漲らして居る、何と云ふ巧妙な怪手段であらう。

此の如き東洋的な神秘的な畫趣は恐らく西人の理解し難いものがあらうが我日本畫壇の近代に此一點を有するだけでも大に誇るに足るであらう、且つ今回の展覽會に陳列されたものは其半數は既往三十年來の種々の展覽會に出品されたもので夫々當時の佳作として一般の認めたものを選出されてあるが獨り此屏風は出品當時には一般世上から非常な惡評を受けたものであるに拘らず、爾來三十年を經て今日再び陳列されると蠢年の世評とは正反對に滿場の群作を睥睨して顏色はからしめ、獨り嬌々として藝苑に雄視することは、恰も四時に於ける群芳の開落が人の眼を喜ばしてもそれは只一時的の轉變に過ぎないが彼の松柏の亭々としてその色を變ぜず、年を經るにつれて、愈その大なることを知るやうなものであらう。藝術の永遠性は時代を超越した不朽の價値で、唯外面の巧緻な技巧などの左右し得る問題ではなからう。

龍虎圖に驚天動地の怪腕を揮ひて一世を驚倒した翁は全然境地の異つた白雲紅葉圖を見せて居る、彼には測るべからざる動の力を現したが、これは底しれぬ靜の深さを示して居る。巾五六尺丈八九尺もあらんかと思はる紙本の巨幅である、此圖は明治二十三年第三回勸業博に出品されたもので龍虎の屏風より更に五年前の力作である雄大豪宕そのものゝやうな屏風とは全然異つた極めて幽



遠深邃な趣致に富んだものである、うち見たるところ何等の奇を弄したところもないが結構の周密なる、眞に深山幽谷の間に彷徨して瀑泉の響、淵猿の聲を聞くやうである、山雲深く鎖して溪霧晴れやらず、崖上の紅楓霜にあき、嵐氣そゞろに人に迫つて神骨殆んど仙ならんとするものか。

此圖また翁一流の謹厚な描寫で一筆苟もせず、その施彩の穩雅清秀なるものと相俟つて無限の深さと測られざる靜さを持つて居る、搖曳せる白雲と云ひ、瀟洞せる淵流と云ひ簡潔古勁な筆致で現はした崖壁や樹木や紅葉遊猿の姿など極めて抽象的な描寫をとりながら全局より受くる感じは極めて實感のゆたかなもので而も詩味の津々たるものを覺ゆるのである、思ふに翁は外面的な自然の實相を寫さずしてその內面に潛在せる眞相を捉へたので卑近な官能的寫實などは之を避けて高雅深邃なる自家の心鏡に映じたる自然の純粹性を現はしたのであるから古畫風の本格的な描寫でありながら古畫に對するやうな感じは毫末もおこらずして不思議なほど見るものを誘ふて畫中の人となさねばやまないのである。

この畫の出來た明治廿三年頃と云へば約四十年以前のことである。まだ其頃は維新後一時の現象として盛に流行した粗猛放縱な或一派の文人畫が漸く地を替て土佐狩野圓山四條など日本的に復活して來た時だつたから藝術の革新と云ふことよりも、只從來跋扈して來た文人畫に替ふるに北畫の諸派が擡頭して來たばかりで、東西兩京とも畫壇は依然として流流の障壁によつて先人の筆法施彩を固守して相對峙した外何等新しい道を開拓する餘裕とてはなく、樣によつて胡盧を畫くの狀態であつた、それ故藝術の沈滯から目ざめ、傳統の羈絆から脫して新生面を拓かんとする革新運動などは到底見られなかつた、それは當時兩京の先進名家がそれ〳〵遺した作品に徵しても明かな事實である。

かゝる時代にあつて別して由緒ある傳統に育つた狩野派棹尾の巨匠は既に眼光を全然他と異つた方面に注いで居つた、それは舊態に安んぜずして時代に伴つて進み動かんとする一種の苦悶であつた、併し自家の奉じ來つた傳統は根底から唯一氣に破壞しやうとするのではなかつた只その尊い傳統の上に新しい自己を築きあげやうとす

る努力であつた、吾國民性に育まれて來た傳統の精神は飽まで尊重して更に自家の個性に染めて時代の進運に順應しつゝ新しく生きんとする藝術的苦悶に外ならない。

これらの畫風を以て今後展開し來らんとする畫壇の新しき種々の風潮と比較して輕率に其可否を品隲せんとするのではないが、併し三四十年前の如上の作品と最近幾年間の多くの作品とに藝術の本質的價値を對比する時、其いづれが果して藝術としての永遠性を把持して居るかは會場を通覽した人々の齊しく認むるところであらう。

かゝる相違は單に俊敏巧緻なる筆觸や明快周到な色調など凡て一時の眼を眩惑せんとする巧妙な表現手段の齎らし得るところではなからう。只一心を藝術の三昧境に沒入して毀譽褒貶の圏外に立つ——淨化されたる人間の力——の偉さである、固より烟霞に嘯傲する仙客でもない、萬卷の畫に親む碩學でもない、英雄豪傑でもなければ善知識でもない、たゞ普通人間性の淨化された力である、人間一たび其心境を利害榮辱の外におき一念をして何等世俗に累せられずば、昂然たるその心境は既に哲人と伍し英雄と併び、碩學神仙と相一致するもので所謂——富貴も貧賤もはた威武も之を如何ともする能はざる——底の藝術の絶對境であるから、その發するものは、自づから是天籟の音でまた人間の聲でなからう。

雅邦翁の如きは、たしかに這般の偉人であつたとらうから幼にして人を驚かす神童の亞流ではたく寧ろ幾十年の辛酸と不斷の修養によつて一歩々徐に築きあげたる神翁と見るのが至當であらう。

○

壯年にして世を去つた畫家で寶玉の光を放つて居る人に春草氏がある、氏の遺作中最も氏の天分を發揮せるのは落葉の屏風であう。

雅邦翁の白雲紅葉圖とは畢竟色調共に著しい相違はあるが二者殆んど共通せる靜寂閑淡そのものゝやうな傑作である、描くところは平素眼前咫尺の間に見て而も輕々に看過すべき卑近な材料を捉へて何等の奇巧を弄せずかくまで平靜に神眞に取扱つて、かくまで詩趣の豐かな表現を見ることは此筆者が畫人として詩人としていかに特異な超邁な資質を持つて居つたかゞ證明される。

墨と赤色と濃淡交錯せる全畫面の單調を破つて中間に



獨り立てる若松の姿が殊に面白く、その色、その枝葉など自然に對する敬虔な態度、對象そのものに沒入して全然筆者の心境に渾化されて居る、幾樹の雜木ばやしの幹ばかりを見せて只小鳥のとまれるクヌギの枝をのみ面白く横ざまにのばした曲線が多くの垂直に立てる樹幹に對して巧妙な變化を見せて極めて纖細な描寫と淡々たる色調で此大畫面の全局に些の間隙を見せないところ此筆者ならでは前後に人もなからうと思はれる、蕭散閑寂な情趣を保ちつゝ無限の深さと紙背に徹する力强さがある、近時畫壇に一の流行を見せて居る宋時院體を模した細線描寫や裝飾風の危い程弱い畫風に較べて實に霄壤の差のみでない、その官能の鋭くて畫品の高きこと場中此圖に比肩するものはなからう。

齡四十に充たずして世を去つた短命な畫人は此一作のみでも確に日本畫壇に不朽に傳ふべきもので、生涯の短かゝりし不幸を償ひ得てあまりあると思ふ。

○

最後にまた明治時代を代表する一大傑作がある、それは雅邦翁と共に狩野派掉尾の巨星芳崖翁の觀音圖である

護嚴の描寫莊嚴の施彩は此畫面に毫末の破綻を見せず、奇警なる構圖は動もすると畫面の落つきを損ずる恐があるが此圖の如き苦心慘憺に餘になれる色調によつてまのあたり慈雲たゞよふ淸淨境を現出して凡骨俗膚も知らず〳〵莊嚴な世界に引込まれて行く外、何等一辭を讚する餘地もない、あらゆる善美の完成された傑作で雅邦翁の雜漢圖とはまた別樣の長所があり別個の世界がある、觀面圖は實に芳崖翁作中の最も完美した傑作のみならず明治時代の代表作として吉名匠と拮抗し得ると同時に將來に於ても恐らく歩武を接するものは少からう、翁の遺作中には他の追隨をゆるさぬ名品も多々あるが時には翁の特質とも云ふべき一種の癖が極端に出ておるものも少くない畢竟翁の作なればこそ他の長所の爲に甚しく累されず却て翁の性格より來る一特色と見らるゝが雅邦翁の圓滿具足の作品とは、その趣致を異にしたものがある。

試みにこの兩巨匠をあげて對比すると、芳崖翁の氣岸跌宕、覇氣人を壓するものは、英雄の如きか。雅邦翁の穩雅清穆、自づから人を服するは、君子の如きか。君子は純であり常軌を逸せないから之を學んで或は及ばずと

も亦甚しく道を謬るには至るまじ、英雄はその行動常に羈束の外にありて、時には鬼面人を嚇すものも全然なしとは云ひがたからう、その質を問ふせずして強て之を學べば或は邪路に陷ることゝなるであらう、敬すべく慕ふべくして、學びがたいものがある。

兎に角兩翁は近代の日本畫壇を代表せる巨人と云つてよからう。

○

今回の展覽會で明治初年より大正へかけて五六十年間に於ける先進名家の遺作は少からず見ることが出來たが一つ私の遺憾に思つたのは、菊池容齋翁の作品がなかつたことである。

翁の歿年は明治の初期で、九十餘年の全生涯を殆んど維新前に活躍した畫家であるから今次の陳列には加へなかつたと思はれるがその和漢に亘れる學殖の深さと、更に志氣の壯烈にして識見の高邁なること、本朝歴史畫に一生面を拓きたるなど擧げ來れば色々の意味で畫壇人としては稀に見るの人傑であり大才であつた、只一部の前賢故實を見ても、其蘊蓄の深さと其畫才の豊かなことを容易に察知することが出來る洵に異色の畫家であつた。

門人某に與へた畫談數則の如きは、流石に學者であつたゞけ當時の畫家としては珍しい識見を持して居つたことが知られる。私は少年の時、數々前賢故實を寫したこともあり此書談を讀んで少からず翁に心醉傾倒して居つた此機會に幾點かの傑作を見ることも出來るかと豫期して居たから、私個人としては實に遺憾に堪へなかつた。

私は此展覽會によつて、幾多の教訓を受け忘れがたい感銘を得たことを喜び、更に一般藝術界に甚大の意義を齎らしたことを東朝社に謝するのである。

（昭和二、七、二五）

鉞ノナリアーク　荒田　燈